

平成28年産夏秋野菜の需給・価格の見通しについて

1 夏秋キャベツ（7～10月）

主産地の動向・供給の見通し等

- 主な産地：群馬、長野、北海道

 - ・作付面積は、群馬は前年比102%、長野は100%、北海道は99%。
 - ・生育状況は、群馬は、は種・定植以降好天に恵まれ、平年より5日程度早い状況。長野は、当初干ばつ傾向であったが、6月以降の降雨で回復し現在は順調な生育となっている。北海道は、干ばつによる生育遅れも5月の降雨で回復。
 - ・出荷開始は、群馬は6月上旬、長野は6月中旬、北海道は7月上旬。
- 供給見通し

出荷量は、主力となる群馬産で生育が順調となっていることから、7月～10月にかけて前年及び平年を上回る出荷となる見通し。
- この先1ヶ月の気象予報は、平均気温は高い、降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ない見込み。

需要・価格の見通し

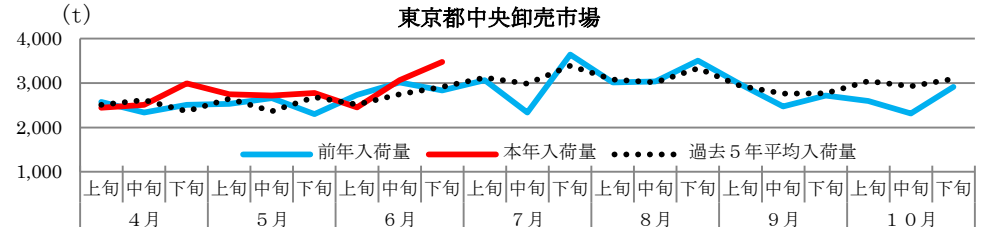
- 需要見通し

簡便化ニーズの高まりにより、千切りキャベツをはじめとするカット野菜の販売点数が2桁の伸びを示すなど販売拡大が見込めるが、猛暑予想から家庭での加熱調理での需要は減少し、また、大きな野菜は敬遠される傾向もあって1玉売等の販売動向は鈍化することから、昨年並みと見込む。

 - ・一部の外食では食味を優先して、サラダ用キャベツがレタスへ変更されるなどメニュー改変する動きも見られる。
 - ・昨年の高値を受け、加工業者によっては契約比率を高めている可能性もある。
- 価格見通し

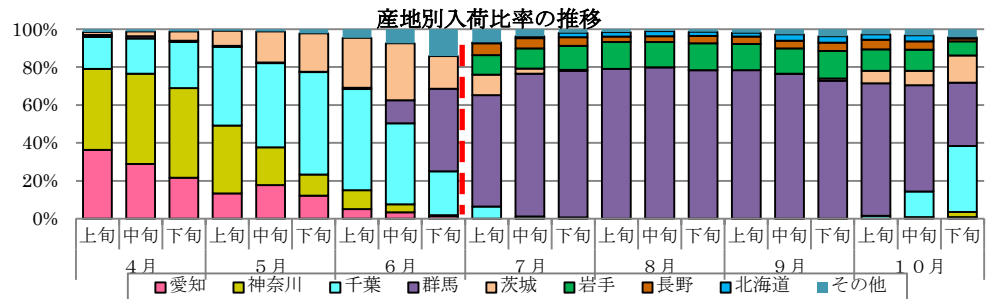
主産地において生育が良好で順調な出荷が見込まれることから、価格は、期間を通して昨年を下回る見込み。ただし、関東産の加工品向けの歩留まりが良く荷余り感はあるものの、関東産が終了すれば安定した相場になる可能性はある。

入荷量の推移等

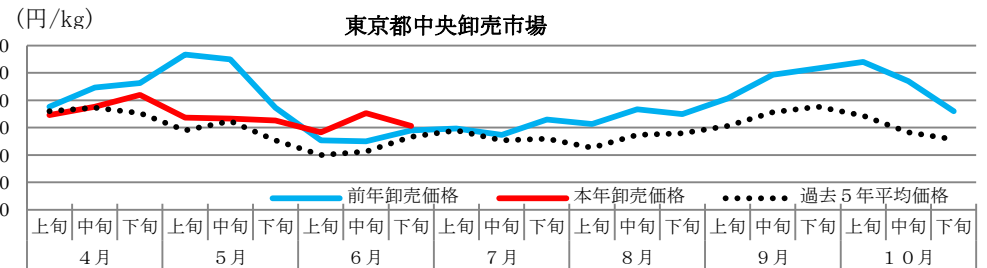


《今後の見通し》

	7月	8月	9月	10月
前年比	↗	↗	↗	↗



価格の推移等



《今後の見通し》

	7月	8月	9月	10月
前年比	↘	↘	↘	↘

2 夏だいこん（7～9月）

主産地の動向・供給の見通し等

- 主な産地：北海道、青森、岐阜

 - ・作付面積は、北海道及び岐阜は前年比100%、青森は98%。
 - ・生育状況は、北海道は、6月中旬以降の降雨の影響では種に遅れが出たほ場があるものの、生育進度は平年並み。青森は、一部の圃場で播種遅れが見られたが、その後の生育は順調。
 - ・出荷開始は、北海道で6月中旬、青森で7月上旬、岐阜で6月中旬。
- 供給見通し

 - ・7月～8月上旬はは種の遅れなどの影響が見られるものの、9月には北海道産の出荷ピークの見込み。全体の出荷量は平年並みの見通し。
- この先1ヶ月の気象予報は、平均気温は高い、降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ない見込み。

需要・価格の見通し

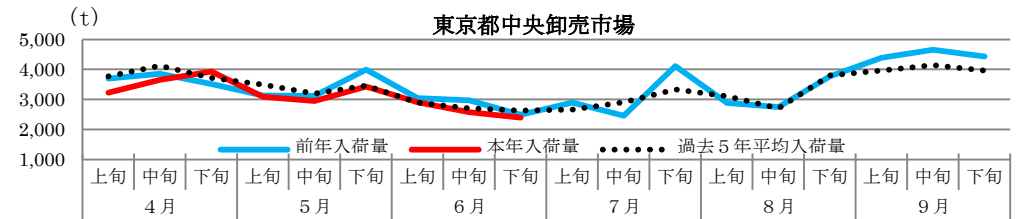
- 需要見通し

 - 需要期ではないため、家庭用のニーズも1/2切など少量サイズが中心。また、猛暑予想から家庭での加熱調理の必要な野菜の需要は減少するので、需要は前年並と見込む。
 - なお、秋頃には、気温の低下に伴い、メニュー提案（おでん等）が順調にいけば伸長も見込める。また、鍋以外にも気温に影響されないメニュー提案の取組をしている事業者も見られる。
 - ・業務用については、契約による確保が全体的に進んでいる印象だが、7月、8月は天候の影響で入荷量が減少し、加工業者等の市場調達の可能性はある。

2 価格見通し

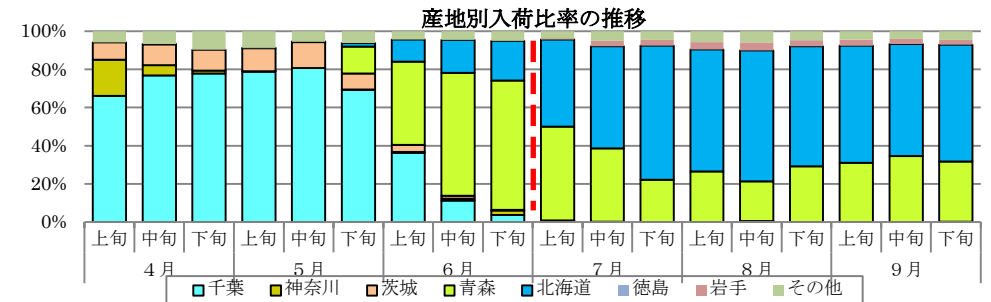
7月～8月上旬は、は種の遅れにより入荷量は減少する見込みであることから、7月の価格は前年を上回る見込み。9月は播種作業の遅れ分等が入荷して入荷量が増加するため、前年を下回る見込み。

入荷量の推移等

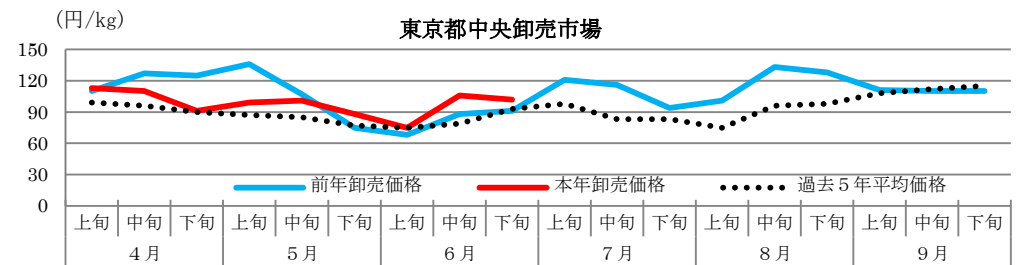


《今後の見通し》

	7月	8月	9月
前年比	↘	→	↗



価格の推移等



《今後の見通し》

	7月	8月	9月
前年比	↗	→	↘

3 たまねぎ（7～10月）

主産地の動向・供給の見通し等

- 主な産地：北海道、佐賀、兵庫

 - ・作付面積は、北海道及び兵庫は前年比100%、佐賀は90%。
 - ・生育状況は、北海道は、定植作業が平年より早く進んでおり、7月上旬は天候不順となっているものの出荷開始は平年よりも早い見込み。佐賀は、病害の発生による不作傾向となっている。兵庫は、定植作業は順調に進んだが一部で病害の発生が見られるほ場がある。
 - ・出荷開始は、北海道の極早生種が8月上旬、佐賀の中晩生種が5月下旬、兵庫の中手種が5月下旬。
- 供給見通し

 - ・病害の発生により、府県産が不作傾向のため、7月の数量は少ない見込み。8月以降は北海道産の出荷が本格化するが、7月上旬の天候不順により、豊作であった前年を下回る見込み。
- この先1ヶ月の気象予報は、平均気温は高い、降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ない見込み。

需要・価格の見通し

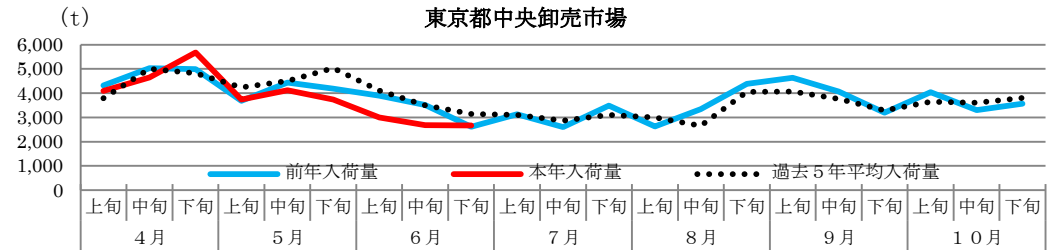
- 需要見通し

□ 7-8月は府県産の不作、輸入もの高騰で苦しい見込み。こうした中でも、サラダ需要は夏期間も堅調なことから、昨年並みと見込む。

 - ・外国産については、アメリカ産から中国産へ輸入先をシフトする傾向や、中国産を避け、ニュージーランド産やオーストラリア産を仕入れる動きが見られる。
 - ・加工業者は、昨年の北海道産の安値もあって国産志向は強いものの、今年の府県産が不作により高値で、量販店等からの引き合いも強く、様子見の傾向。
- 価格見通し

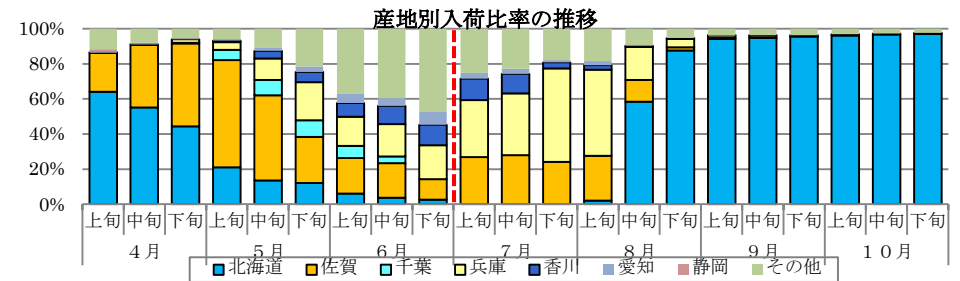
7月～8月は、府県産の病害の発生により入荷量が大幅に減少し、価格は前年を上回る見込み。9月以降は北海道産の入荷が本格的に始まるため、価格は前年並みの見込み。

入荷量の推移等

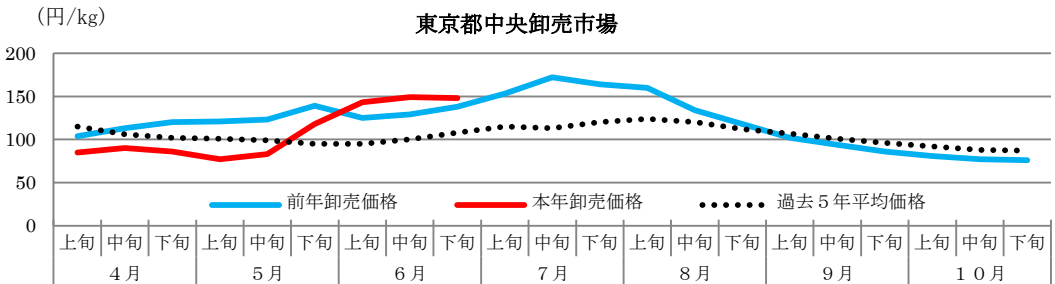


《今後の見通し》

	7月	8月	9月	10月
前年比	↘	↘	→	→



価格の推移等



《今後の見通し》

	7月	8月	9月	10月
前年比	↗	↗	→	→

4 秋にんじん（8～10月）

主産地の動向・供給の見通し等

- 主な産地：北海道、青森

 - ・作付面積は、北海道は前年比103%、青森は97%。
 - ・生育状況は、北海道は、6月の天候不順によりは種作業が遅れ、生育は平年に比べ5日程度遅く、地区・ほ場間に差がある。青森は、春播き作の生育は順調ながら、夏播き作では、6月の降雨では種の遅れが見られる。
 - ・出荷開始は、北海道で7月中旬、青森が7月上旬。
- 供給見通し

 - ・北海道は面積の増加により出荷量は増える見通し。全体の出荷量は平年をやや上回る見込み。
- この先1ヶ月の気象予報は、平均気温は高い、降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ない見込み。

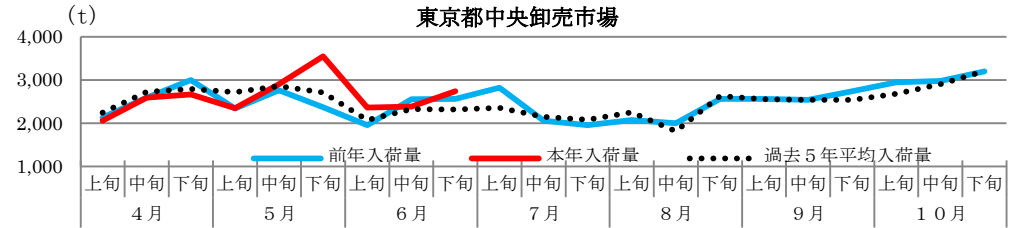
需要・価格の見通し

- 需要見通し

 - ・需要増の要因はないが、北海道産の生育が良好で、秋口にはじゃがいも・玉ねぎを含め供給が安定化し調理メニューも広がることから需要は昨年並みを見込む。
 - ・中国産が近年になく安値となっているにもかかわらず、国内需要としては引き合いは弱い。
- 価格見通し

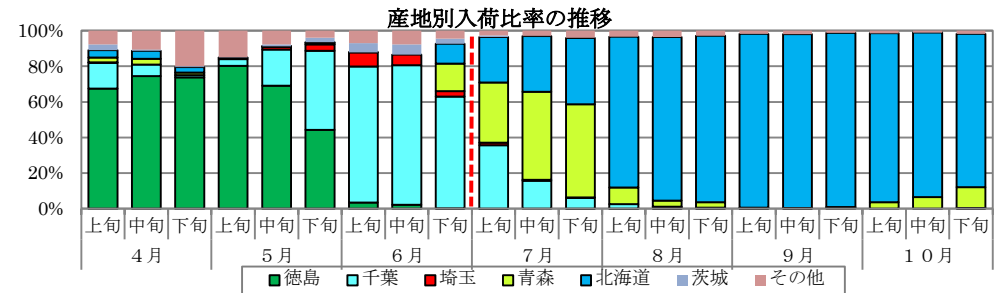
8月は、上旬までは北海産が種の遅れにより入荷量が減少するものの、その後は産地が出そろい入荷量が増加することから、価格は前年を下回る見込み。9月以降は、6月のは種作業に遅れが見られた地区があるものの概ね順調な入荷が見込めることから、価格は前年並みの見込み。

入荷量の推移等

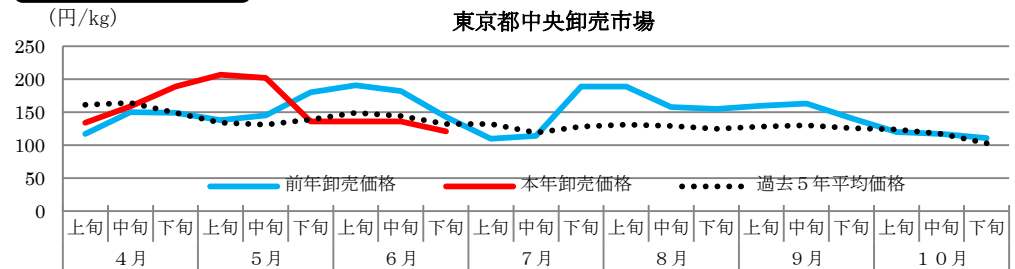


《今後の見通し》

	8月	9月	10月
前年比	↗	→	→



価格の推移等



《今後の見通し》

	8月	9月	10月
前年比	↘	→	→

5 夏はくさい（7～9月）

主産地の動向・供給の見通し等

- 主な産地：長野、北海道、群馬

 - ・作付面積は、長野は前年比104%、北海道は100%、群馬は99%。
 - ・生育状況は、長野は定植後の生育が順調に進み、各作型で前進傾向となっており、今後も安定した出荷が見込まれる。北海道は、6月中旬以降の天候不順により生育停滞が見られたが、7月に入ってから回復基調。群馬は定植後に適宜降雨があり、生育は順調となっている。
 - ・出荷開始は、長野で5月下旬、北海道で7月上旬、群馬で5月下旬。
- 供給見通し

 - ・主力となる長野産は、生育の前進および大玉比率が高くなっているため、現在、前年を上回る出荷が続いている。8月以降の出荷分についても同様に順調な出荷が見込まれる。
- この先1ヶ月の気象予報は、平均気温は高い、降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ない見込み。

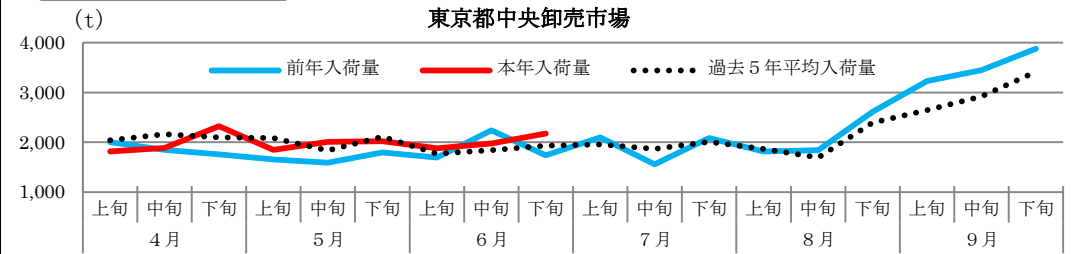
需要・価格の見通し

- 需要見通し

 - ・夏場の需要減に対して、鍋物需要がある9-10月は気温次第ではあるが、昨年並の需要を見込む。また、鍋以外にも気温に影響されないメニュー提案の取組をしている事業者も見られる。
 - ・家庭での需要は減少。漬物等加工原料用は回復を予想。
 - ・漬物業者は、ここ数年の高値を受けて契約取引を増量する動きにあるが、生産サイドは契約取引を減らす傾向にあり、今年の契約率はメーカーによって大きく異なる傾向にある。
- 価格見通し

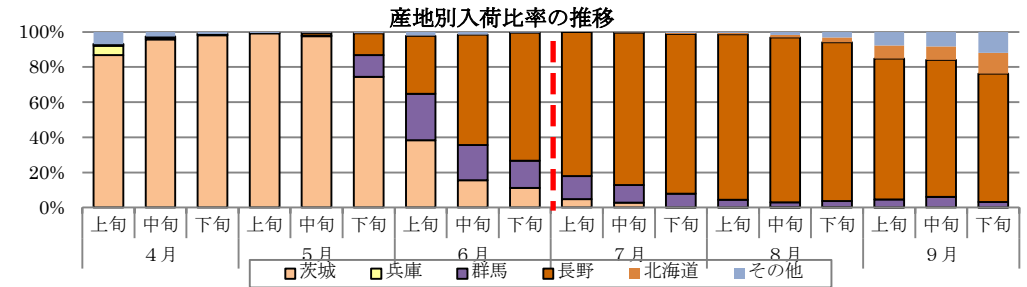
7月～9月は、前年の高値を受けて主産地において作付け意欲が旺盛で作付面積が前年に比べ増加していることに加え、天候にも恵まれて生育は順調で大玉傾向であることから、価格は前年を下回る見込み。

入荷量の推移等

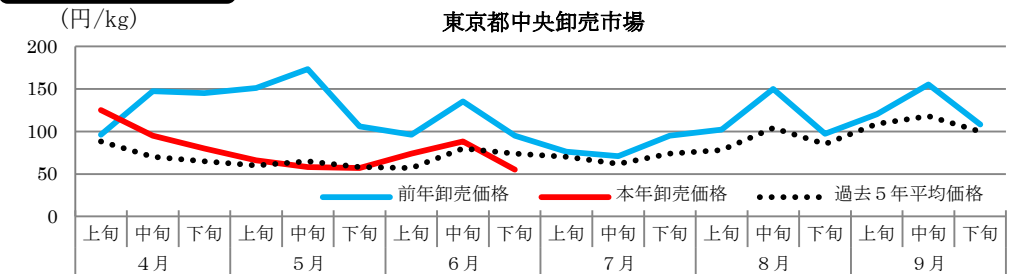


《今後の見通し》

	7月	8月	9月
前年比	↗	↗	↗



価格の推移等



《今後の見通し》

	7月	8月	9月
前年比	↘	↘	↘

6 夏秋レタス（6～10月）

主産地の動向・供給の見通し等

- 主な産地：長野、群馬、茨城

 - ・作付面積は、長野及び群馬は前年比99%、茨城は102%。
 - ・生育状況は、長野は6月下旬の降雨で生育が進み、出荷ペースが早まった。7月も適度な降雨があり、生育は順調に進んでいる。群馬も長野と同様、生育は前進傾向となっている。茨城は、は種開始は8月5日前後、定植は盆明けを見込む。
 - ・出荷開始は、長野で6月中旬、群馬で6月上旬、茨城で10月上旬。
- 供給見通し

 - ・主力となる長野産は生育が前進傾向で、今後も安定した出荷が見込まれる。天候次第ではあるが、期間を通して平年を上回る出荷量となる見通し。
- この先1ヶ月の気象予報は、平均気温は高い、降水量は平年並か多い、日照時間は平年並か少ない見込み。

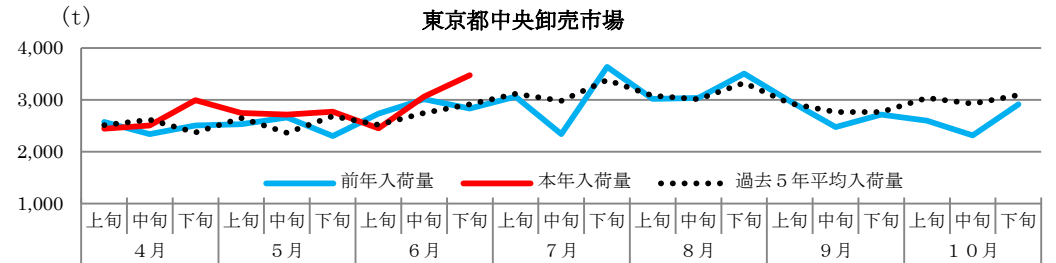
需要・価格の見通し

- 需要見通し

 - ・猛暑予測からサラダメニューの需要が増加し、また、カット野菜の消費拡大も進んでいることから、需要は昨年に比べ増加と見込む。
 - ・ただし、ニーズの多様化でリーフ系やロメイン等に需要が分散する傾向が見られる。
 - ・産地の意向により前年より加工契約数量が減少している。
- 価格見通し

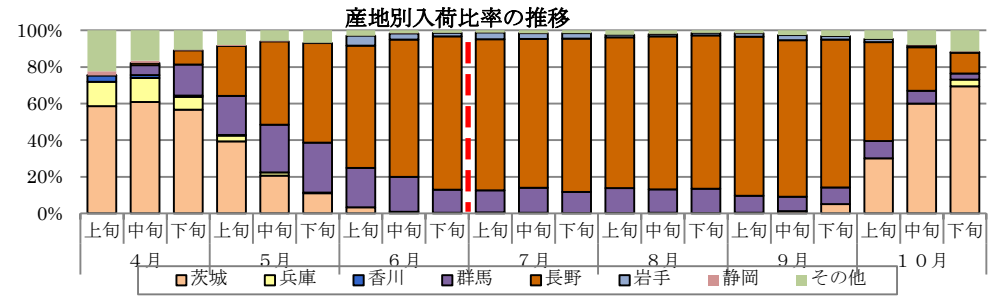
作付面積が前年並みとなる中、生育は良好で出荷が前年に比べ増加することから、価格は前年を下回る見込み。

入荷量の推移等

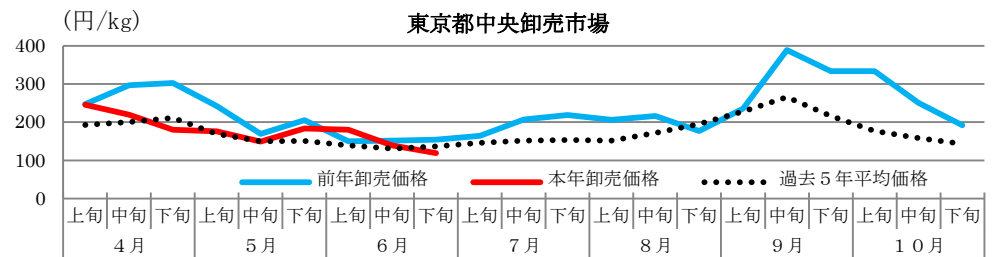


《今後の見通し》

	7月	8月	9月	10月
前年比	↗	↗	↗	↗



価格の推移等



《今後の見通し》

	7月	8月	9月	10月
前年比	↘	↘	↘	↘

その他、夏秋野菜全体の主な消費の動向等

① 景気による野菜消費の影響

- ・ 野菜は食生活の基本なので、景気に影響を受けることは少ないと考える。
- ・ 景気よりも作柄に左右されると考える。
- ・ 野菜消費自体は低く推移していると考え、①簡便化ニーズの高まり ②食卓メニューの変化（量を食べるメニューの減少） ③内食に対する節約傾向、に対応しつつ需要を喚起することが重要。
- ・ 所得格差は広がっており、低所得者向けに、買やすい価格帯の野菜の品揃えが必要となる。
- ・ 景気と連動するのは生鮮食品の商品単価であり、景気の先行きの見通しがいいと購入する生鮮品の質が上昇する傾向にある。そのため、DI が 50 を割っている段階では、やや安い野菜の販売量が増える傾向にある。

② 佐賀県産たまねぎ等の作柄不良に伴う外国産の輸入量への影響

- ・ 小売現場では、国産重視での売り場作りで展開されているため、輸入物は全く使わないといった事業者や、どんなに増やしても 1 割程度といった事業者がいることから、大きな輸入増にはならないと予測。なお、輸入先としては、中国を避け、NZ産やオーストラリア産を仕入れる動きが見られる。
- ・ 加工向けは年間計画での原料手配なので、大きな輸入増にはならないと予測。
- ・ 不作は九州・四国エリアで、愛知や東日本の産地は平年作。

③ 気象庁の今夏の全国的な高温予報による野菜消費への影響

- ・ 高温となった場合、加熱調理の必要な素材の需要は減少し、より簡便化ニーズ（「火を使わない」、「レンジアップ」、「時短」等）が高まると予測。また、サラダ、冷麺類の付け合わせや薬味（大葉、茗荷、生姜、ニンニクなど）、スイカなどの涼味系で消費される野菜は需要が増加する。
- ・ なお、産地では、温暖化に対応して耐暑性のある品種の導入、定植時期の変更、貯蔵出荷に試験的に取り組むなどの動きが見られる。

④ 野菜の機能性に関する消費者の声やそれへの対応状況、販売への影響

- ・ 特保等との違いを消費者がどれだけ認識しているか不明な上、農産物の機能性表示はハードルが高く、工場野菜に限定されがちな為、現状は注意深く動向を見守っている段階。
- ・ 業務需要の場合、現状では機能性よりも国産化・有機・地場がキーとなっている。
- ・ 一方で、機能性に対する関心は高く、特にマスコミ等で報道された一部のスプラウトについては供給が不足しているといった動きも見られる。

- ・ 野菜でつくる家庭フレッシュジュースの提案など猛暑をからめた検討を行っている。

⑤ 食の簡便化や食にかける時間の短縮化による野菜消費の新たな変化

- ・ 大きく変化していくと考えられ、現状は、簡便化・時短を求める動きが拡大する段階。その中で、今後は簡便商品に「味」、「鮮度」が求められると予測。
- ・ カットサラダも単品（キャベツ千切り等）が伸びているが、ほうれん草・ロメインレタス・トレビス等を使用した高価格商品もコンビニで伸びている。簡便性ではヨーロッパを中心としてオープンを使用したレディーミール商品の広がりが顕著と聞いている。
- ・ 料理セットは相変わらず順調で、リピート率が高い。いため物需要から火をあまり使わないレシピ、メニュー提案などを検討中。
- ・ 簡便化が進行することで、ゆっくり時間をかけて熱を入れることによる野菜の甘さや、美味しさが損なわれるマイナス面も考慮すべき。
- ・ 外食、量販店等では、厨房・バックヤードでの人手不足への対応や廃棄物の削減等を図るため、芯抜き・カット等の前処理・一次加工された野菜を調達しているところも多い。

⑥ 主要6品目以外の野菜で今後注目すべき野菜

- ・ 需要の増加が期待される品目はミニトマト、ベビーリーフ、さつまいも、ケール、南瓜。
特にさつまいも、南瓜は、スイーツや惣菜への用途が広い粘質系の需要が高まると予測。
- ・ さつまいも（紅はるか）は、焼き芋・スイーツ・惣菜で需要が伸びている。すだち・国産レモン・国産パプリカ・ハーブ類・珍しいキノコ類なども注目される。

⑦ 円高傾向における生鮮野菜の輸入動向について

- ・ 輸入は国産との価格の比較対比で増減すると思われるが、一度輸入して取り扱った商品は、次年度以降も継続して輸入される傾向が強いことを懸念している。
- ・ 輸入している業者は限定的であり、輸入野菜で新たな品目は無いに等しい。加工・業務需要商品の国内産地化は確実に進められている現状にあることから、為替による数量増は基本的には小さいと考える。